

## 烏魯木齊（ウルムチ）から伊犁（イリ）河へ

### 姓だけの中国名

新疆省の省都烏魯木齊（ウルムチ）を訪問したのは第1回は二〇〇一年三月二七 四月二日、第二回は二〇〇二年三月一七 二八日である。第1回は新疆大学の巴力登（バリデン）教授およびゲジヨ医師を訪ねての旅であった。正確にはA・アルプチャー・バリデンだと思いが中国のパスポートには巴力登と記されている。この漢字名は姓のみを表し名を含まない。少数民族の出であるからか娘さんと息子さんと二人の立派な子供さんがいるがこれらのパスポート名はどうするのかとお節介ながら心配するのである。ところがこういうことに顔してバリデン教授はあっさりして「どうにでもなりますよ」という立場である。解釈すると本来はモンゴル語で表記すべき人名を中国語（漢字）を使っているのだからそもそも近似であって仮のものだという立場である。だから、英語の論文でも自分の名前をBaldenとBaldingとを混用しているのは統一すべしと進言したことがある。サウジアラビアで聞いたことだが名前を英文字で登録させる欧米式銀行システムは姓名の同定で破綻するということであった。大国の人は少数民族の民族に対して横柄な立場をとる。日本も植民地朝鮮で創氏改名政策をとった。私の所属する学部でバリデンさんに1年間客員研究員をもらったことがあり、ゲジヨ医師は東大の医学部に在籍したバリデンさんの義弟で在日時代に交流したが、帰国してコルラの病院で働いている。ゲジヨさんはコルラから夜汽車で烏魯木齊に歓迎に来てくれた。

第1回訪問の経験から烏魯木齊の状況がわかったので少し足を伸ばしてみようと翌年また旅をした。直行便を利用するとわずらわしい北承空港を通らずに行けるのはありがたいことであった。しかし、新聞から切り抜きしてとってある文字やら考古学やらのお偉い方々の国家機関がらみのシルクロード旅行記には書いてない単独旅行者の試練がいろいろある。西安から烏魯木齊に行く空の便はたくさんある。搭乗券をもらって指走の便を待つてデイスブレイを見ていると搭乗便は遅延が大幅でやがてデイスブレイからはみ出してしまふ。しかし、西安経由の烏魯木齊への便はほかにもいろいろあり西安空港を次々と離陸している。係員に搭乗券とは別の便に乗ることを希望するとどうぞという。だまっていたら遅れの便の到着まで待たされたわけだ。ということと搭乗し烏魯木齊につくまでの間に預けた荷物は一緒に来るのだろうかと気になった。空港で荷物待ちはいやである。バリデンさんと烏魯木齊の旅行社の人が飛行場で歓迎してくれ便の遅れを知って

いて早くついたと喜んでくれたが一方荷物の到着が気になる次第であった。ところがなんと荷物はちゃんと現れたのである。ここいらへんがわからないところで、好意でそうなるのか、規則でそうなるのかが気になるところである。

次の例だが帰りの烏魯木斉から西安行きのももわからないことが発生する。九時四〇分発　〇9503便の搭乗券をもって待っているが搭乗案内に便名は出ない。違う便名の搭乗が進む。隣にいた中国人の乗客が係員に何かを聞き早く乗れといわれている様子でこちらも真似して搭乗券を見せると乗れということだ。どうも一台の飛行機に二つの便名がついているようである。解釈するに西安での連絡便がいくつもあり、その西安からの便名が烏魯木斉発までに延長されて　〇9503の代わりに案内されていたようだ。ちなみに　〇は新疆民航でいまは南方航空に合併されたようである。オリンピックまでには万事解決するのであるうか。

### 伊犁河へ

第一回の烏魯木斉訪問でバリデン夫妻、ゲジヨさんが標準観光コースを案内してくれた。吐魯番（トルファン）、ベゼクリク千仏洞、交河故城、火炎山、高昌故城見学である。大歓迎会の翌朝のこの自動車の旅は気分悪く死ぬ思いであったがなんとか持ちこたえた。これが第一回訪問の最大の学習で乾杯は慎まなければならないのである。

足を伸ばそうという第二回訪問旅行でつまずいたのは烏魯木斉の滞在を取り消せなかったことである。烏魯木斉を基地にして動くつもりで滞在費を前払いしていたので東京の旅行社に電話して変更を申し込んだが認められないという。今後その旅行社は使つまりと心に決めたが後の祭りであった。しかし、烏魯木斉の旅行社の「矢島様伊寧への旅」というパソコン印刷の提案書に魅かれて超豪華二泊三日運転手付き自動車大旅行を決めた。費用はキロ二元で一六一〇キロ分三二二〇元、他に二泊分のホテル代が計四〇〇元、ホテルは伊犁の桃源大酒店であった（当時の元は一四・六円）。

三月二五日に新疆大学で学生に話をしてくれとバリデンさんに頼まれ英語で話していいかというよいよという。中国の学生も大変化である。パソコンを使って話をするにしようとして英文の原稿を急遽準備して二〇日に渡した翌日の期待に満ちた出発であった。事は三菱パジェロとわかった。運転手は高峰さん、三〇ぐらいの青年でもうすぐ結婚する相手がいるとのことであったが、単語を数えるほどしか知らない私の中国語を使つての助手席での旅は三月二一日午前八時半に始まった。旅行社の辛社長の話では高さんは英語を勉強中とのことであったが英語の会話は成り立たなかった。

烏魯木齊、石河子、烏蘇、精河、伊寧と続く天山北路の自動車道は立派なものであった。伊寧まで道の悪かったのは二カ所、ひとつは烏蘇のあたりで道が低くなったところがあり水がたまって先行の立派な乗用車が車体を汚さぬように徐行を続けるため時間がかかったのと三月下旬とはいえ氷の張るサリム湖から伊寧への峠の雪道徐行だけであった。烏魯木齊 伊寧六九〇キロを走破して夕方にはホテルに到着する。そこは都会であり部屋にはテレビがあった。夕食はホテルでとったが注文して出てくるものの量の予測がむずかしいので次の夕食は高さんにくつついていくことにした。

翌二二日伊寧を流れる伊犁河の大橋を見学した。河岸に石の案内板がありウイグル語と漢字が並んでいたが道路標識もすべて同様の二国語併記である。次いでカザフスタンとの国境のゴルガスに行ったが開いている店は少なかった。おだやかな大陸の国境であった。また、惠遠鎮はアヘン戦争で責任をとらされた林則徐が追放されて善政を敷いた村で惠遠城の鐘楼は村の中央に立派に建っていた。旅行書にある隣西大寺も見たかったがウイグルの人たちが道にあふれ漢人の車で突き抜けるのは無理という気がして探すのはやめてもらった。夜は車で街の中に行き高さんと食事をした。安くうまいのであるが量が多いのはいたしかたない。

翌二三日は烏魯木齊への六九〇キロの再走破である。天山山脈をはるか右手に見ながら砂漠地帯をひたすらに走る。途中休んだところには石が積み上げられ赤い布きれが風にはためいていた。無事大旅行は夕刻終了した。

三月二五日の講演会は学生が三〇人くらいでそのうち女性が一〇人ほど、話の後の討議で「われわれのパソコンの設備は悪く先端の仕事に近づき得ないがどうしたものか」などとむずかしい質問が出て私自身も一九六〇年代は計算機の仕事で同じ思いをしたのだなどと答にならぬことを述べた。

乗り換え時間を除けば六時間ほどでつく烏魯木齊は遠いところではない。家への手みやげはクルミ、干しぶどう、干し杏であるがバリデンさんがどうしても持って行けという強いお酒はまだ手元にある。

『アジア・アフリカ図書館報』復刊一四号二〇〇四年二月号掲載